

長崎に死す：江戸中期の出島オランダ商館における 検視について

ミヒエル, ヴォルフガング
九州大学：名誉教授

<https://hdl.handle.net/2324/4752545>

出版情報：Itan. 114, pp.64-75, 2021-12-30. The Kansai Branch of the Japan Society of Medical History
バージョン：
権利関係：

長崎に死す — 江戸中期の出島オランダ商館における検視について

Death in Nagasaki — Post-mortem examinations at the Dutch trading-post Dejima (18th c.)

はじめに

近世の日本における人体解剖の歴史は、多くの場合、山脇東洋が宝暦四年（一七五四）に行った刑死体の解剖から始まるとされているが、東洋のこの有名な「腑分け」は、一人の優れた学者による孤高の決意によって突然生まれたものではなかった。それより約一世紀も前の、紅毛流外科が芽生えたとされる一六五〇年代から、出島オランダ商館の外科医と日本人医師との医学交流において解剖学が極めて重要な役割を果たしてきたことは、当時の写本や版本、レメリン解剖書の抄訳などで確認できる。寛文一〇年（一六七〇）頃には検視の手引書ともいえるべき中国元代の名著『無冤録』が復刻され、日本にも法医学に関する基礎知識を根付かせた。また、

ヴォルフガング・ミヒエル

延享三年（一七四六）に刊行された画期的な整骨医書『骨継療治重宝記』では、著者の高志鳳翼が整骨医に対して中国の古典や西洋の文献の研究に加えて「山野にすてたる骸」の観察を勧めている。本稿では、このような時代的文脈で捉えられる出島オランダ商館における検視を取り上げる。

長崎で亡くなった西洋人

近世の東アジアでのヨーロッパ人の死亡率は高かった。夏に長崎湾に入港する東インド会社の船には必ず病人がいて、出島の小さな病院（図1）で亡くなる者も、停泊中の船内で亡くなる者もいた。病院の患者が増えてくると、船の外科医が呼ばれることもあった。伝染病が発生したと思われる年も

あり、例えば、一七一三年の夏には合計二十三名の病人が奉
行の許可を得て上陸し入院していたが、幸いなことに、ほぼ
全員が助かった。^①一七八八年八月中旬に到着した二隻の蘭船
では、航海中にすでに二十二名が亡くなり、三十一名が重病
の状態だった。その後、十月末までにさらに二十一名が亡く
なった。^②一方、出島の駐在員の間では、良好な栄養状態と生
活環境のおかげで病気は比較的少なかった。

かつて長崎地方において、埋葬された南蛮人宣教師の骨が
聖遺物として崇められたことがあったため、ヨーロッパ人を
埋葬することは禁止されていた。一六〇二年に稲佐山の悟
真寺の一角に中国人の墓地が設けられたが、出島の紅毛人

が亡くなると、長崎湾の入り口まで運ばれて
水葬に付された。商館長ハッパルト (Gabriel
Happart) が亡くなった承応三年 (一六五四)
からは東インド会社の死者もこの墓地に埋葬
されるようになった。

歴代商館長の日誌には、十八世紀の死亡者・
総数四百七十四名が記録されている (表1)。
商館医トゥンベリー (Carl Peter Thunberg)
は、遺体が後に掘り起こされて焼却されるこ
ういう噂があったことを伝えている。^③狭い墓地
の収容力をはるかに超える死者が出たので、

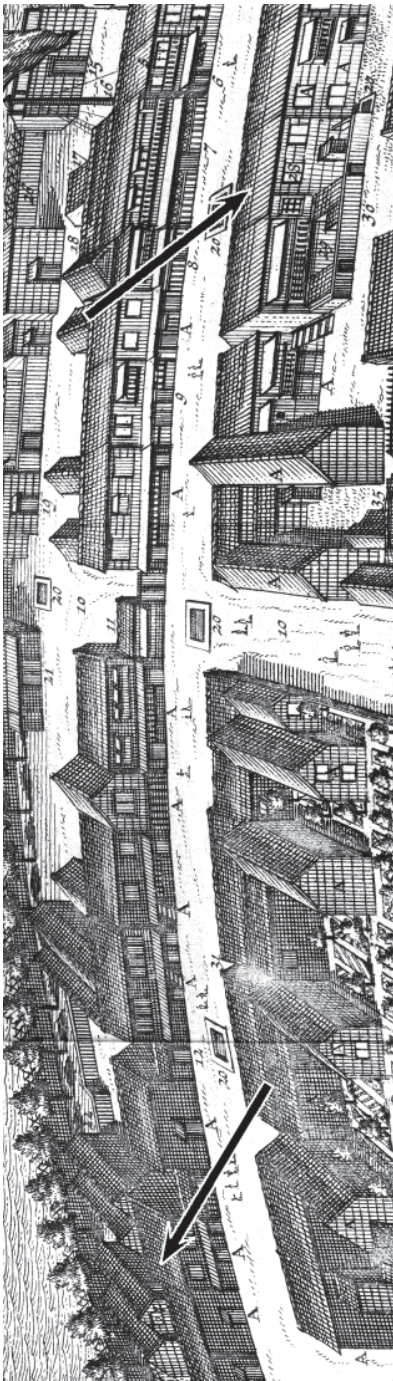


図1
商館の病院 (左) と外科医の住居兼治療室
(商館員フォートの絵図に基づく銅版画より^③)

表 1 年度ごとの死者数（著者作成）

年度	死者数	年度	死者数	年度	死者数
1698/99	2	1732/33	6	1766/67	3
1699/1700	5	1733/34	14	1767/68	3
1700/01	4	1734/35	4	1768/69	10
1701/02	1	1735/36	5	1769/70	3
1702/03	2	1736/37	5	1770/71	3
1703/04	3	1737/38	2	1771/72	6
1704/05	1	1738/39	13	1772/73	0
1705/06	1	1739/40	5	1773/74	16
1706/07	4	1740/41	1	1774/75	10
1707/08	6	1741/42	8	1775/76	11
1708/09	2	1742/43	1	1776/77	10
1709/10	1	1743/44	8	1777/78	15
1710/11	1	1744/45	10	1778/79	14
1711/12	2	1745/46	7	1779/80	9
1712/13	8	1746/47	6	1780/81	8
1713/14	2	1747/48	2	1781/82	1
1714/15	4	1748/49	1	1782/83	3
1715/16	7	1749/50	5	1783/84	4
1716/17	0	1750/51	5	1784/85	5
1717/18	0	1751/52	3	1785/86	9
1718/19	3	1752/53	3	1786/87	15
1719/20	0	1753/54	5	1787/88	21
1720/21	3	1754/55	6	1788/89	14
1721/22	1	1755/56	8	1789/90	4
1722/23	1	1756/57	5	1790/91	0
1723/24	1	1757/58	2	1791/92	7
1724/25	5	1758/59	2	1792/93	0
1725/26	1	1759/60	5	1793/94	0
1726/27	2	1760/61	4	1794/95	0
1727/28	1	1761/62	8	1795/96	0
1728/29	5	1762/63	3	1796/97	1
1729/30	7	1763/64	5	1797/98	1
1730/31	2	1764/65	6	1798/99	0
1731/32	11	1765/66	4	1799/1800	0

奉行所によるそのような対応は十分に考えられる。

水夫、大工、庭師など身分の低い者の遺体は、奉行所の検使の指示に従う「Coeli（苦力）」が引き受け、稲佐山の墓地に埋葬された。商館長や上級商務員の場合は、ヨーロッパ人数名が墓地まで棺に付き添うことを奉行が許可した。もちろん、

ん、宗教的儀式は一切禁止されていた。一七九八年に東海道で亡くなった商館長ヘンミイ（Gjlsbert Hemmiij）は、掛川の天然寺に埋葬された。一七六八年に草津で死去した商館医ド・オー（Jan François de Haut）は、京都に運ばれ、真如堂（真正極楽寺）に埋葬された。一七七八年七月末に

出島に向かう船の中で亡くなった次期商館長デュルコップ (Hendrik Godfried Dürkopp/Duurkoop) は、通詞の計らいにより、到着時には重病であり、その後に病死したという形で処理された。一七九四年に絵師司馬江漢が、その壮麗な墓石を『西遊旅譚』で紹介している。⁶⁾

商館長日誌に、天然痘、熱病、肺疾患、腹水、癌、結石、咽喉炎などの具体的な病名が記されることはまれであった。病気以外の、暴力沙汰や溺死などの事故による死亡例も確認できる。一七四八年六月に盗みの容疑がかけられた奴隷は鞭で打たれて激しく暴れたため、大工の剣で殺された。⁷⁾ キリスト教で罪と見なされる自殺の場合には、多くの商館長が強い拒否反応を示した。また、その背景は不明だが、十八世紀後半にはかなりの数の外科医が出島で亡くなっている。⁸⁾

オランダ商館員の奴隷

オランダ東インド会社の富は、搾取された奴隷の犠牲の上に築かれたと言っても過言ではないが、彼らは出島商館の記録にはほとんど登場しない。『新長崎市史』(二〇一二年刊)では、「奴隷」という語は使われず婉曲的に「召使」と呼ばれており、江戸時代の版画には「黒坊」や「咬哩黒坊」として登場している。東インド会社の水夫と同様に、身分の低さを示すために小さく描かれている(図2)。



図2 「かびたん」、「くろぼう」、「またろす」

(一七四〇年代、神戸市立博物館蔵)

商館長日誌は特別な理由がない限り彼らの存在には触れていない。一七世紀にヨーロッパ人に連れられて来日した奴隷の人数は明らかではないが、一六五六・五七年には六名が、一六六〇・六一年には二十八名が記録されている。⁹⁾ 一六八三・八四年の江戸参府の際に江戸城の白書院で行われた私的な謁見には日本語が話せるモセ (Moses) という奴

隷が随行し、綱吉から肌の色についてなど様々な質問を受けた。^⑩出島には通常十名から二十名の奴隷がいたと思われる。一六九九年に商館長ダイクマン (Hendrik Dijkman) は、オランダ人が連れてきている奴隷に対して日本人が興味を示したことを述べている。^⑪

十八世紀に入ると、商館長の多くが毎年六月に出島に滞在している人員の名簿を作成した。その一部は現存しており、さらに出島商館の人員を含む乗船者の名簿もある。奴隷 (slaven, swarte/zwarte jongen, slaave jongen, lijfjengen) に ついて、出生地、年齢、所有者 (leijfheer) の名が記載されている。奴隷の大半は東南アジア (ボエジス、スンバワ、バリ島、チェリボン、ティモール、ニアス、マカッサル、テルナテ島、バタフィア) 出身で、ベンガル出身の者もいた。奴隷たちは所有者から Januarij, September, Fortuin (富、幸運) Paris, Apollo, Lakei (召使い) などの新しい名前をつけられた。一七三一年四月に商館長ブケステイン (Pieter Boekesteijn) は、バタフィアでの奴隷の値段について尋ねられた。彼によると、若い奴隷は小判五、二十枚分、ベテランの奴隷は小判六十、一〇〇枚分にもなった。所有者が死んだり、ヨーロッパに戻ったりすると、奴隷が解放されることもあるとのことだった。^⑫

出島にいたのは、ほとんどが商館長や副館長が連れてきた

奴隷だったが、あまり給料の高くない商務助手や外科医でも、たまに一人か二人の奴隷を所有していることがあった。スウェーデン人医師トゥンペリーは十分な資金を持っていなかったため、バタフィアで借りた奴隷を日本に連れて来ていた。^⑬

出島商館長日誌からは様々な軋轢やもめごとがうかがえる。奴隷が逃亡を図ることもあれば、トゥンペリーの奴隷のように商館内に身を隠すこともあった。^⑭時には暴力的な対立も起こった。バタフィアと同様に、出島での奴隷の扱いは無慈悲で残忍なものだった。窃盗などの犯罪の容疑がかけられた者は、自白を促すために、はしごに縛りつけられて鞭で打たれた。多くの容疑者は長い間鎖につながれた。出島での生活に耐えられず自殺を図る奴隷もいた。ある者は首を吊り、ある者は喉を切り、腹を切った者も一人いた。

出島における検視の諸事例

十七世紀にはバタフィア総督府が日本にいる商館員の死亡に関心を持つことはあまりなかったようだ。一六四一年からは出島商館に外科医が駐在していたが、関連の記述が日誌に初めて現れるのは一六九九年のことである。

十七世紀にはバタフィア総督府が日本にいる商館員の死亡に関心を持つことはあまりなかったようだ。一六四一年か

らは出島商館に外科医が駐在していたが、関連の記述が日誌に初めて現れるのは一六九九年のことである。

一六九九年三月二日、会計士のボール (Albert Bor) が首を吊った。商館内は大変な騒ぎになり、奉行所の役人による詳細な取り調べも行われた。ヨーロッパでは自殺者にはキリスト教式の葬儀は認められなかったが、ボールの亡骸は通常通りに稲佐山の墓地に埋葬された。⁽¹⁵⁾

一七〇四年十一月二十七日、会計士のウェセマンズ (Christoffel Wesemans) が死去。翌日、数名の下級検使 (onderbongiosen) が遺体を調べるために現れた (om te visiteeren en te besien)⁽¹⁶⁾。

一七二二年十月十四日、アウウェルケルク号の船員が船頭のコイス (Jan Gerritsz Kujs) をナイフで刺し、コイスはその直後に亡くなった。出島の外科医ワーヘマンズ (Willem Wagemans) と二人の船医が船長の立ち会いのもとで遺体を切開して調べた後に (hadde g'opent en geviseteert)⁽¹⁷⁾、ナイフの傷が致命傷であると報告した。

一七一九年一月十一日、下位外科医のデ・フォーヘル (Hendrik de Vogel) が重い病気で亡くなった。彼は息を引き取る前に上位外科医スワルト (Barent Swart) に自分の十三歳の奴隷を遺した。翌日、奉行所の役人が遺体を検分してから (het doode lighaem van de bongjoisen besien was)

墓地に運ばせた。⁽¹⁸⁾

一七一九年一月二十三日、金銭の盗難を巡って激しい諍いが起こった。ペンガル出身のペドロ (Pedro) という奴隷が疑われ、十二・十三歳の少年だったにもかかわらず、何度も殴られた。彼は一瞬の隙にカミソリを手に取り、自分の首を三分の二ほど切ってしまった。二月五日、「この悪党 (booswicht)」が「最期の喘ぎ (den laatste snik)」をした。奉行所から派遣された二人の役人が遺体の絆創膏を剥がして傷を確認した。同じく容疑をかけられていたアンドリース (Andries) とがう奴隷は、どれだけ暴力を受けても自白しようとはしなかった。手錠をかけられ、Dorn という倉庫に入れられて他の奴隷から隔離された。三月一日、彼は遺体で見えられた。外科医スワルトと三人の商館員が遺体を調べたが、何の外傷も確認できなかった。

一七二六年八月十日、腹水 (waterzucht) を患っていた下位商人デース (Pieter Dees) が「安らかな死を迎えた」。役人はすぐに棺 (een kist、箱) に納められていた遺体を確認し (besigtigt)、二・三の質問をした後に墓地へ運ばせた。一七三〇年八月十九日と二十日には商務助手のクルドルプ (Johan Pieter Crudorp) と商館長の奴隷が相次いで死亡した。二十一日、上位役人二人と下位役人数人が現れて遺体を検査した (visiteerde de lijken)。その後二人の遺体は「い

つもの埋葬場稲佐」に運ばれた。

一七三三年九月二十四日、フォルトイン (Fortuin) という奴隷の遺体が発見された。その状況は混乱していたので、商館長ファン・デル・ベル (Hendrik van der Bell) の指示で、上位外科医トンプソン (Hendrik Thompson) 、下位外科医ロレッテ (Willem de Lorette) 、船の上位外科医ファン・ハーステル (Hendrik van Haaster) がその遺体を検視した。骨折はなかったが、首の右側に小さなナイフによる傷が見つかった。商館長らが行った聞き取り調査によって自殺の可能性が浮上した。バタフィアでの再調査も念頭に置きながらファン・デル・ベルが詳細な報告書を作成した。⁽²³⁾

一七三四年一月四日に商館長デ・ラフェル (Rogier de Laver) は、五十七年前の一六七七年の商館長日誌の記録から、出島専属の四名の日本人医師 (japanese doctoren) がいたことと、彼らの子孫も「島の医師 (Eijlands doctoren)」として雇用されていることを知った。翌日、「[Janagie SioTak] と [Moeta Gaats Gencoo] という二人の日本人医師が商館を訪れ、ともに重病を患っていた商務助手ファン・デーレン (Adrianus van Deelen) と下位商人ケラー (Martin Keller) の脈診などを行った。ケラーの病気は「肝臓と肺臓が熱く、胃腸が冷たいことが原因」であると診断された。外科医ファン・ハーステルが、ファン・デーレンの病気は以前

のひどい転倒 (een swaare val) によるものであろうと述べたところ、日本人医師は「自分たちの知識は身体の中までであり、その他のことについては日本の外科医に聞いてほしい」と言い、通詞今村源右衛門が「(日本の外科医は) 無知なものだ」と付け加えた。様々な煎じ薬が処方されたにもかかわらず、ケラーは一月十三日に二十八歳で「主のもとで永眠した」(in den Heere ontslapen)。遺体は翌日、二人の上級役人、三人の下級役人および数人の町役人によって調べられ、七人の商館員を伴って墓地に運ばれた。彼らによると遺体は十分に深いところに埋葬された。⁽²⁴⁾

一七三六年六月八日、商館長コープ・ア・フルーン (Coop a Groen) の奴隷オクトーベル (October) が首を吊った。遺体は役人と商館医ウィルマート (Nicolaas Wilmart) によって丹念に調べられた (behoorlijk is geviseteerd)。首を吊ってから死に至るまでの時間は短かった。自殺だったため、商館長は通常の埋葬はふさわしくないと考えていたが、彼の抗議に反して (tegen alle gedane protestatien) 遺体は箱 (een kist) に入れられて埋葬された。⁽²⁵⁾

一七四二年七月二日、大工の家の裏で商館長の奴隷アプリル (April) の遺体が発見された。彼は首を吊っており、外科医ムスクルス (Philipp Pieter Musculus) によって丹念に調べられた (behoorlijk visiteren)。アプリルの遺体も

商館長の反対を押し切って箱 (een kist) に入れられて埋葬された。⁽²⁶⁾

一七四四年二月三日、会計士クロイト (Jan Kluit) の奴隷コネモン (Connemon) が出島乙名の家で腹を切り、腸が床に転がり出た状態で発見された。まだ息があつたので、ムスクルスのところへ運ばれ、三人の証人の立ち会いで尋問を受けた。コネモンは自殺を図つたと述べた。奉行所の役人二人が到着したときには、彼はすでに亡くなっており、その翌日に埋葬された。⁽²⁷⁾

マドラス生まれの奴隷ダーフィト (David) は料理人として商館長に仕えていたが、一七四五年三月十九日の朝、台所で首を吊つた状態で発見された。商館長は彼がまだ生きていたかどうかを下位外科医に確認させたが、すでに死後硬直が始まつていた。奉行所の役人は、オランダ人と奴隷たちに自殺の理由について尋ねた。⁽²⁸⁾

一七六一年八月二十五日、ドイネンブルグ号の水夫ユンゲ (Jacobus de Jung) が行方不明になった。翌日に日本人が彼の遺体を海から引き上げた。役人と外科医バウエル (Georg Rudolph Bauer) が遺体を調べ、暴力の痕跡はまったく見られなかったとの報告を出した。⁽²⁹⁾

一七六四年八月十八日、湾内に停泊していたソイデルランド号から行方不明になっていた船員の水死体が海で発見

された。遺体は役人とともに上位外科医ボルステルマン (Cornelis Borstelman) が検分した (door den oppermeester gevisiteerd)。⁽³⁰⁾

一七七六年九月十九日、商館長の奴隷の一人が船から海に飛び込んで溺死した。遺体は日本人が発見した。翌日に奉行所の役人、商館医トゥンベリー、二人の商務助手により検査 (examine) が行われた。⁽³¹⁾

残念ながら歴代の商館長は検視の詳細にはほとんど触れていない。基本的には病気などによる自然な死か、異状死かを判断するということだった。前者の場合には遺体は翌日に埋葬されるのが普通だった。後者の場合には打撲、骨折、傷などの暴力の痕跡がないかを調べて、外傷が見つかった場合はそれが致命的なものかどうかを調査する必要があつた。その際には身体を切開して内部を確認することもあつた。首吊り自殺の場合は外科医は死亡までにかかった時間に注目したようだ。

商館長ティツィングの実験

一七七九年から一七八五年の間に計四年間、出島で勤務していた商館長ティツィング (Isaac Titsingh) は日本の社会と文化について精力的に研究し、ヨーロッパに帰ってからも蘭学者数名と文通したことで知られている。彼は日本人の

葬儀について調べる中で真言宗の開祖空海が広めた加持土砂のことを知った。それがあまりにも不思議な話だったので、ティツィングはある実験によってこの「粉 (poudre)」の効果を確認し、「土砂 (Dosia)」とその発明者弘法大師 (Kobodaishi) について」の長い論文を書いた。

「寒さがすでに相当きびしい一七八三年の十月のことだった。若いオランダ人が出島で死んだので、私は医師に、死体を洗ってから完全に硬くなるように開いた窓の前の机の上に置いて一晩中外気にさらすように、と指示した。

翌朝、数人の日本人と数人の商館員と私が死体を調べに行った。死体は木片のように硬くなっていた。「檜林」善兵衛という阿蘭陀通詞の一人が、三徳 [santock]、すなわち紙入れを取り出し、粗い粉の入った長方形の包みを手にした。それはあの有名な土砂の粉であった。彼はその一つまみを死体の耳に入れ、もう一つまみを鼻孔と口に入れた。するとやがてこの薬の効果によるのか、あるいは私には見破れなかった欺瞞の効果によるのか、それまでは胸の上には組ませてあった両腕が自然に落ちてしまい、そして自分の時計で計って二十分もしないうちに死体はもとのような柔らかさを取り戻した。

私はこの現象は何か不可思議な毒 [quelque poison

subtile] の作用によるものと思ったが、この土砂の粉は毒とは程遠く、むしろ難産の時の素晴らしい薬であるとの説明を受けた。⁽³²⁾

ティツィングが粉と呼んでいたものは、白砂を洗い清めて密教で用いられる光明真言を唱え、法に従って加持したものである。それを死体や墓の上に撒けば、罪が消え失せて死体が柔軟になり、極楽往生できるとされている。病人に与えれば苦痛を取り除くともされているが、医薬品ではない。大学で医学を学び法学博士号を取得していたティツィングにとって、死者が出たことは「Dosia」の物理的效果を観察するためのまたとない機会でもあった。

出島における検視の時代的背景について

西洋医学の継続的な受容が始まった十七世紀中頃から、当時の日本の為政者たちも解剖学に強い興味を示していた。例えば一六五〇年には出島商館の外科医カスパル・シャムベルゲル (Caspar Schamberger) の治療を受けた大目付井上政重が東インド会社を通じて解剖書を取り寄せ、カスパルの後任の医師たちに説明させた。一六五九年と一六六〇年には井上の要請を受けて商館医が彼の目前で豚の解剖を行った。同じ時期にヴェサリウス (Andreas Vesalius) やファン・デ・

シユピーヘル (Adriaan van de Spiegel) の解剖書も日本に入ってきた。また、かつてカスパルの治療を受けた老中稲葉正則は、一六六〇年にレメリン (Johann Remmelin) の解剖書『小宇宙鑑 (Pinax Microcosmographicus)』を注文した。⁽³³⁾ 出島商館所蔵の解剖書が日本側に貸し出しされることもあった。何の目的で借りたのかは不明だが、元禄十二年 (一六九九) 六月に長崎奉行近藤左衛門備中守用高が解剖書を借りたまま、丸一ヶ月間も返さないことがあった。⁽³⁴⁾

長崎や江戸で歴代の商館医が日本人に伝授した知識は、写本はもちろん版本によっても広く伝えられた。寛文十年 (一六七〇) に刊行された『阿蘭陀外科良方』には、すでに「骨」(骨)、「髓筋」(神経)、心臓、肺、肝臓、脾臓、腎臓、胃、「隔皮」(隔膜)、「心経」(動脈)、「肝経」(静脈)、血液循環、食物消化などに関する説明がある。同様に中村宗璵が貞亨元年 (一六八四) に発表した『紅毛秘伝外科療治集』や元禄九年 (一六九六) 刊行の『阿蘭陀外科指南』には解剖学的な記述が見られる。一六八〇年代に本木良意が作成したレメリンの『小宇宙鑑』からの抄訳は、当時急成長しつつあった通詞蘭学の成果であった。

十七世紀後半には死体の法医学的検査への関心も高まった。先駆的な役割を果たしたのが老中板倉重矩である。板倉は京都所司代を三年間務めた際に、中国元代の至大元年

(一三〇八) 刊の王與による検視書『無冤録』を復刻させた。『江戸時代書林出版書籍目録集成』で出版年を確認すると、寛文十年 (一六七〇) 刊書籍目録「故事」の部に「無冤録二冊」とあるのをはじめ、寛文十一年 (一六七二)、延宝三年 (一六七五)、元禄五年 (一六九二)、元禄十二年 (一六九九) 刊などの記載が見られ、当時の関心の高さがうかがえる。このような法医学書は解剖書ではないが、人間の遺体を観察と調査の対象として、その内外の状況を正確に把握して報告を行うために必要な基礎文献として一九世紀まで頼りにされていた。

おわりに

オランダ商館長は商館内における出来事について責任を負っていた。不審死についてはバタフィア総督府で再調査されることもあり、そのために詳細な報告書を作成した商館長もいた。

遺体の調査に際してオランダ側で最も重要な役目を担ったのは商館医だった。船員の死亡時には船医が検視に加わることもあった。多くの場合、検視は証人の立ち会いのもとで行われ、その結果は商館長に報告された。

長崎奉行は天領における行政上の権限とともに司法権も有していた。重要な事案については江戸に報告書を送る必

要があった。出島での不審死の解明も長崎奉行の管轄である。蘭船の船長らは長崎湾内で亡くなった乗組員の遺体の埋葬を希望し、そのためには乗組員死亡の件を奉行所に通知しなければならなかった。出島に派遣された役人は場合によっては外科医の立ち会いなしに遺体を調べることもあり、棺の中にキリスト教の装飾品が入っていないか確認することもあった。⁽³⁵⁾

上述のすべてのやりとりには阿蘭陀通詞が立ち会っていた。彼らは役人と商館員との間の意思疎通を図り、奉行に提出される報告書の作成にも携わった。商館医と親密な交流のあった吉雄耕牛（一七二四～一八〇〇）ら意欲的な通詞たちは検視を通じて解剖学が実際に役立つことを実感するようになり、上述のような事例の一部が耕牛の家塾成秀館をはじめ長崎の私塾で話題にされたであろうことは想像に難くない。

参考文献

- ・慶応義塾大学附属研究所斯道文庫編『江戸時代書林出版書籍目録集成』東京、井上書房、第一（一九六二年）、第二（一九六三年）。
- ・ツンベルグ著、山田珠樹訳注『ツンベルグ日本紀行』東京、駿南社、一九二八年。
- ・Isaac Titsingh: Cérémonies usitées au Japon pour les mariages et les funérailles. Paris: A. Neyveu, 1819.

注

- (1) NA 1.04.21, NFJ 124, pp. 218, 247, 249, 252, 254, 265, 275, 276.
- (2) NA 1.04.21, NFJ 199, pp. 124-127, 129, 132, 133, 135, 137, 140, 148, 152, 155, 163, 166, 168, 173, 178, 181, 183.
- (3) Thomas Salmon: Hedendaagsche Historie of tegenwoordige Staat van alle Volkeren. Amsterdam, 1728°. 作者フョーフト (Gerrits Voogt) は一六九九年に商務助手として来日。その後、彼の名は倉庫の管理者および商務員として商館長日誌に頻繁に言及されている（一七〇四年、一七〇九年、一七二一年～一七二二年）。
- (4) 『ツンベルグ日本紀行』七五～七六頁。
- (5) NA 1.04.21, NFJ 188, pp. 103, 107.
- (6) 『西遊旅譚』（大坂）、文栄堂、寛政六年序（卷之三）。
- (7) NA 1.04.21, NFJ 158, pp. 37-38.
- (8) Carel Gabriel Springer（一七六二年四月二五日）、Cornelis Borstelman（一七六五年四月一八日）、Christiaan Hendrik Ferbitski（一七七九年三月二二日）、Thomas Xaverius Negers（一七七八年一月二七日）、Hendrik van der Hoeck（一七八四年二月二六日）、Reinier Mollen（一七八五年一月二八日）、Johan George Falcke（一七八七年二月一七日）。
- (9) NA 1.04.21, NFJ 70, p. 1；NFJ 74, p. 37.

- (10) NA 1.04.21, NFJ 97, p. 33.
- (11) NA 1.04.02, VOC 614, p. 816.
- (12) NA 1.04.21, NFJ 141, pp. 114-115.
- (13) 『シンズルン日本紀行』 八五頁。
- (14) 『シンズルン日本紀行』 八五～八六頁。
- (15) NA 1.04.02, VOC 1614, pp. 802-806.
- (16) NA 1.04.21, NFJ 116, pp. 25-26.
- (17) NA 1.04.21, NFJ 123, pp. 366-367.
- (18) NA 1.04.21, NFJ 129, pp. 44-45.
- (19) NA 1.04.21, NFJ 129, pp. 52-61.
- (20) NA 1.04.21, NFJ 129, pp. 75, 85-86.
- (21) NA 1.04.21, NFJ 134, pp. 226-229.
- (22) NA 1.04.21, NFJ 140, pp. 181-182.
- (23) NA 1.04.21, NFJ 143, pp. 199-203.
- (24) NA 1.04.21, NFJ 144, pp. 51-54, 61-62.
- (25) NA 1.04.21, NFJ 146, p. 114-115.
- (26) NA 1.04.21, NFJ 152, pp. 112-113.
- (27) NA 1.04.21, NFJ 153, pp. 69, 84-85.
- (28) NA 1.04.21, NFJ 155, p. 147.
- (29) NA 1.04.21, NFJ 171, pp. 71-72.
- (30) NA 1.04.21, NFJ 174, p. 95.
- (31) NA 1.04.21, NFJ 186, pp. 123-124.
- (32) 原文 Isaac Titsingh (1819), pp. 215-216.

- (33) Wolfgang Michel: On the Reception of Western Medicine in Seventeenth Century Japan. 吉田忠、深瀬泰旦編『東と西の医療文化』 思文閣出版、二〇〇一年、三一七頁。
- (34) NA 1.04.02, VOC 1614, pp. 819, 835.
- (35) NA 1.04.21, NFJ 144, p. 62.

(福岡市)

ITAN

Journal of the Kansai Branch of the
Japan Society of Medical History

No. 114 December 2021